

随想

日米安保条約50周年に思う(4)
思い起こされる日独伊三国同盟

2010年3月5日
阿部敏勝(会員)

弥生3月、待望の春です「梅は咲いたか、桜はまだか」の心境ですが「本当の春、平和の春」はまだまだ遠くその最大の障害が日米安保条約です。

締結50周年記念を迎えた1月19日日米政府は共同文書、鳩山首相の談話、オバマ大統領の声明等を発表し日米同盟の維持、拡大、深化、永続などを謳いましたが、普天間基地問題の迷走のため(うがって考えればこれを目くらましとして)あまり議論の対象になって居りません。実は今年のアメリカ合衆国国防計画書(QDR他、平山武久訳)によりますと

米国は地球的責任を担った地球的軍事国家である。

40万人規模の兵力を地球の何処にでも部隊を派遣できる体制を作る

そのためのパートナーである日本と韓国に核の傘(核兵器)を抑止力として持ち込む等々と記されており、所謂「核持ち込の為の日米秘密文書の存在、非存在の議論」などナンセンスな事が解ります。

話は変わりますが今年は米英を仮装敵国としたあの「日独伊三国軍事同盟締結(1940年)から70周年に当たります。ヒットラーユーゲントの来日や旗行列などが思い出されますが、この同盟こそ所謂「集団的自衛権」の典型であり、これを前提にしてアジア太平洋戦争に突入した日本がヒットラーの背信に気付くのは敗戦後の事です。当時の政治家や軍部、そして一部国民と今の政治家、自衛隊の幹部そして一部国民とのの相似性を見る度に戦争の巻添えを喰うだけでなく、平時でも基地問題や有事法制、財政負担などで国民を苦しめ、憲法第9条の廃棄へ導く(5月18日には改憲手続法が発効します)日米安保条約を皆んなで押出して本当の春を迎えたいものです。

(以上)

(筆者は当会理事)